



ORAGA

小良ヶ浜

HAMA

富岡町教育委員会
協力 小良ヶ浜行政区



ORAGA

小良ヶ浜

HAMA

富岡町教育委員会
協力 小良ヶ浜行政区



昭和50年代の小良ヶ浜漁港

ORAGA

小良ヶ浜

HAMA

富岡町教育委員会
協力 小良ヶ浜行政区

刊行に寄せて

小良ヶ浜行政区は、言葉づかいは荒いが、気持ちはみんなつながっていて、まとまりがあるのが特徴です。行政区のために皆さん協力してくれるのが良いところだと思います。思い出として心に残っている行政区対抗のソフトボール大会。気持ちは勝負にこだわって、皆さん協力してまとまっています。

また、行政区内にある神社や薬師堂などに対しては皆さん協力して積み立てしたり、お金出し合って寄付したり、例を挙げれば、六地藏や日吉神社、東堂様、あと県道の慰霊碑など。大切なものはちゃんと祀って供養しましょうという考えを皆さん持っています。

小良ヶ浜行政区が今回、今までの歴史の本を作るということになったときに、私が一番頭に置いたのは、東京電力の問題で小良ヶ浜行政区が自然

消滅するんじゃないかということです。今回の東京電力の事故で小良ヶ浜の歴史がぶつんと尻切れトンボになるのは一番寂しい。ぜひとも昔からの小良ヶ浜行政区を知っている地元の皆さんに協力願って残したいと思いました。

やはり、先祖が小良ヶ浜で歩んできた道ですから、それを子供たちや孫たちに「小良ヶ浜行政区というものはこれだけのものがあつたんだ」とつないでいくために、半永久的に本として残したい。本がある限りは、小良ヶ浜の歴史が分かりますから。

ぜひこれから、子供たちや孫たちに「私のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんはこのようにここにいたよ」ということを誇りにしてほしいと思います。

令和四年（二〇二二）初春

小良ヶ浜の風景

かつての小良ヶ浜漁港

小良ヶ浜と人々

震災前の海岸線

現在の海岸線

小良ヶ浜灯台

小良ヶ浜灯台と鎮魂碑

境川河口・浜須賀

空撮・小良ヶ浜

かつての日常生活

震災前の活動

赤坂神社

石塔石仏神様、墓地

小良ヶ浜の石塔石仏分布

語られる小良ヶ浜

佐藤乙丸さん

関根亮一さん

大岩一彦さん

大友正昭さん

佐藤静枝さん

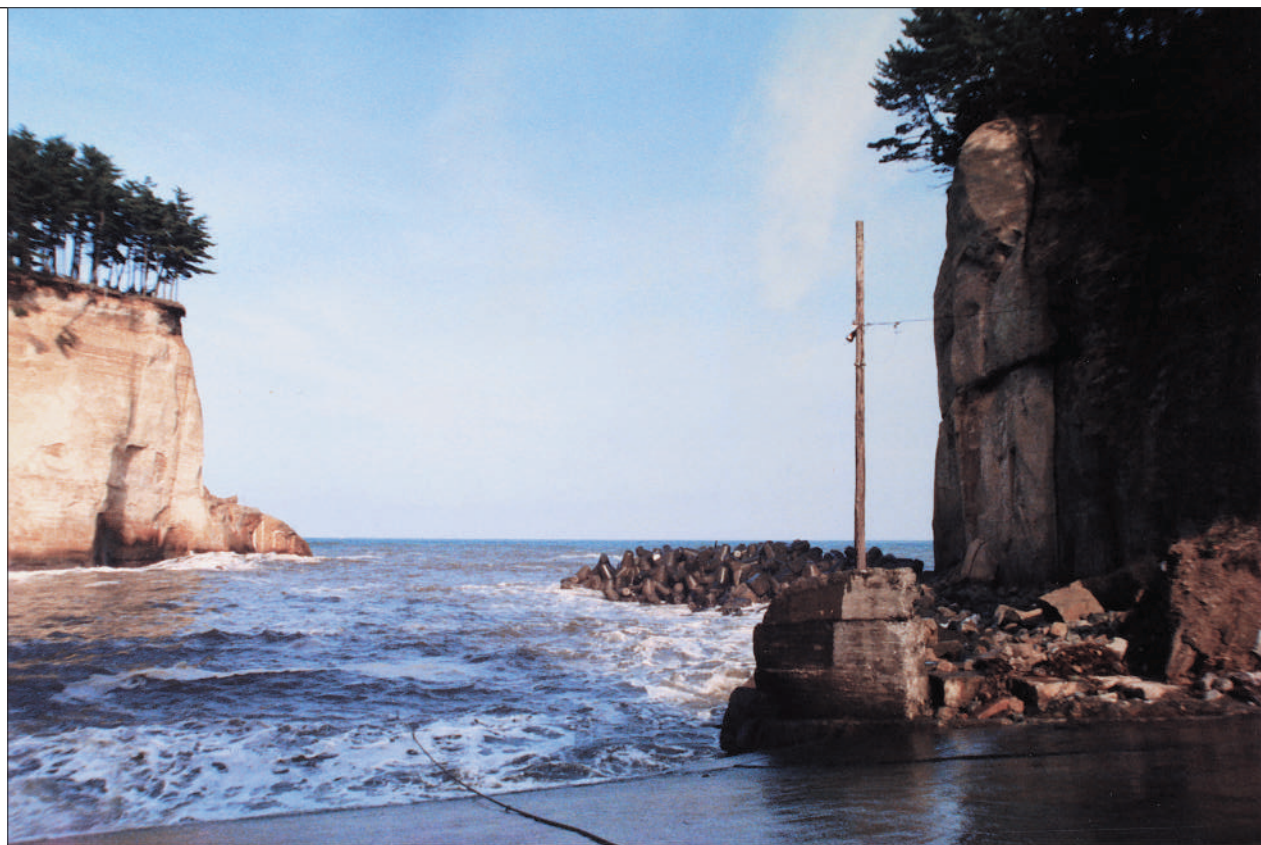
佐藤光信さん

佐々木賢一郎さん

関根 稔さん

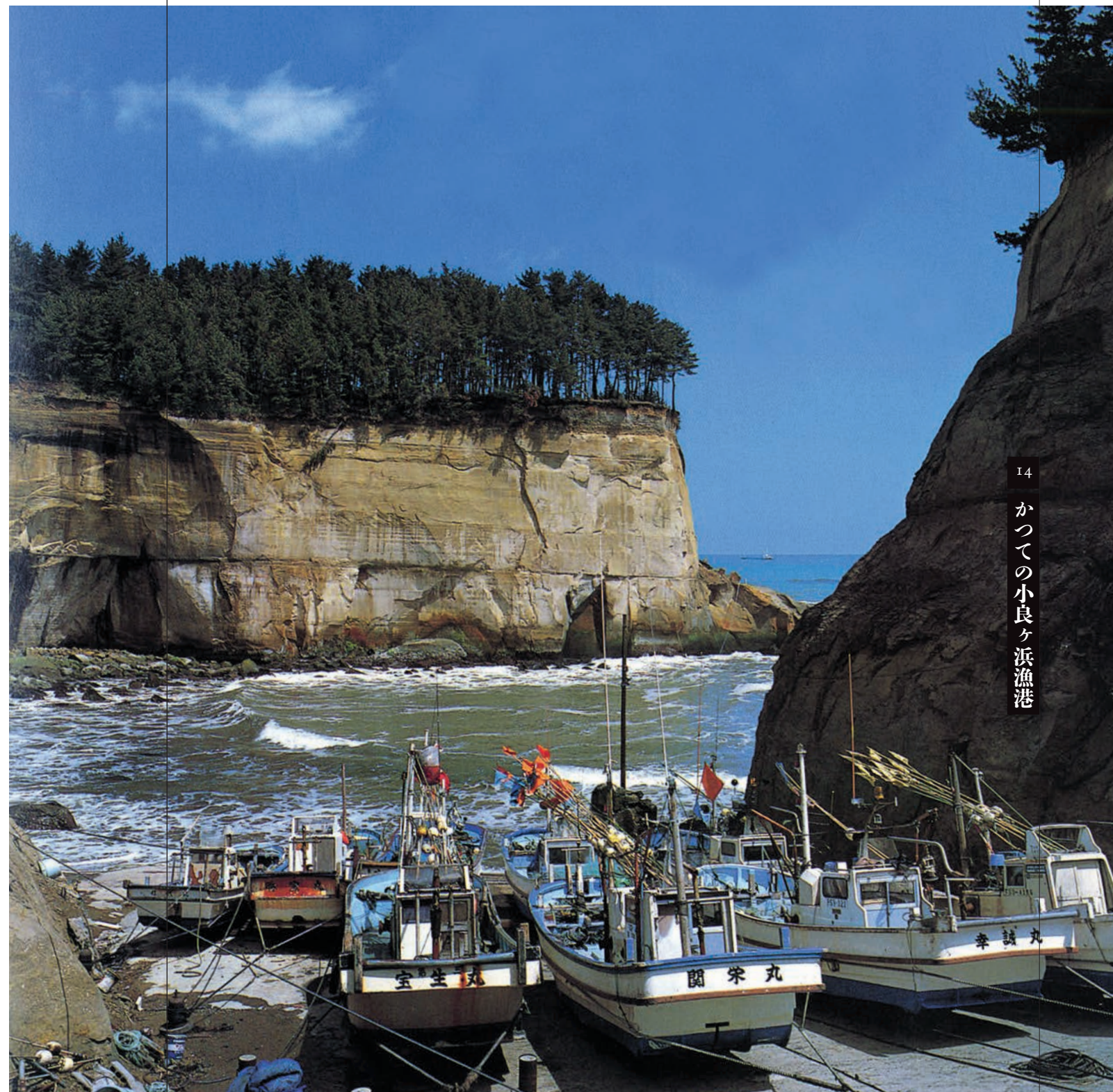
廣畑節子さん	92
佐藤秋夫さん	96
関根節子さん	108
佐藤光清さん	115
三瓶一見さん	120
小良ヶ浜 歴史編	135
第一章	137
小良ヶ浜という地域と行政区	
門馬 健	
第二章	141
小良ヶ浜・小良浜争論	
井上拓巳	
第三章	149
港・漁業	
井上拓巳	
第四章	155
小良ヶ浜地域における塩業	
門馬 健	
第五章	161
三瓶一見について	
西村慎太郎	
第六章	165
近代の林業と縁故引戻地	
天野真志	
第七章	175
小良ヶ浜の農業	
西村慎太郎	
第八章	209
小良ヶ浜地域における産 畜種の変化と商品化	
大和田侑希	
第九章	215
関根熊吉と和算	
土屋賢一・國分遥菜	
第一〇章	219
小良ヶ浜地域とスポーツ	
堀本航生	
第十一章	227
廣畑先生の事蹟	
三瓶秀文・堀川新一	
第十二章	233
寺院・神社・祠・祭り・墓地・葬送儀礼	
猪狩英伸	
小良ヶ浜 資料編	249
小良ヶ浜区有文書目録	250
小良ヶ浜字名一覧	262
あとがき	263
富岡町教育委員会教育長 岩崎秀一	





15

かつての小良ヶ浜漁港



14

かつての小良ヶ浜漁港



25

震災前の海岸線



24

震災前の海岸線

昭和46年（1971）の小良ヶ浜漁港

かつては塩炊き釜が並んだ海岸線





35

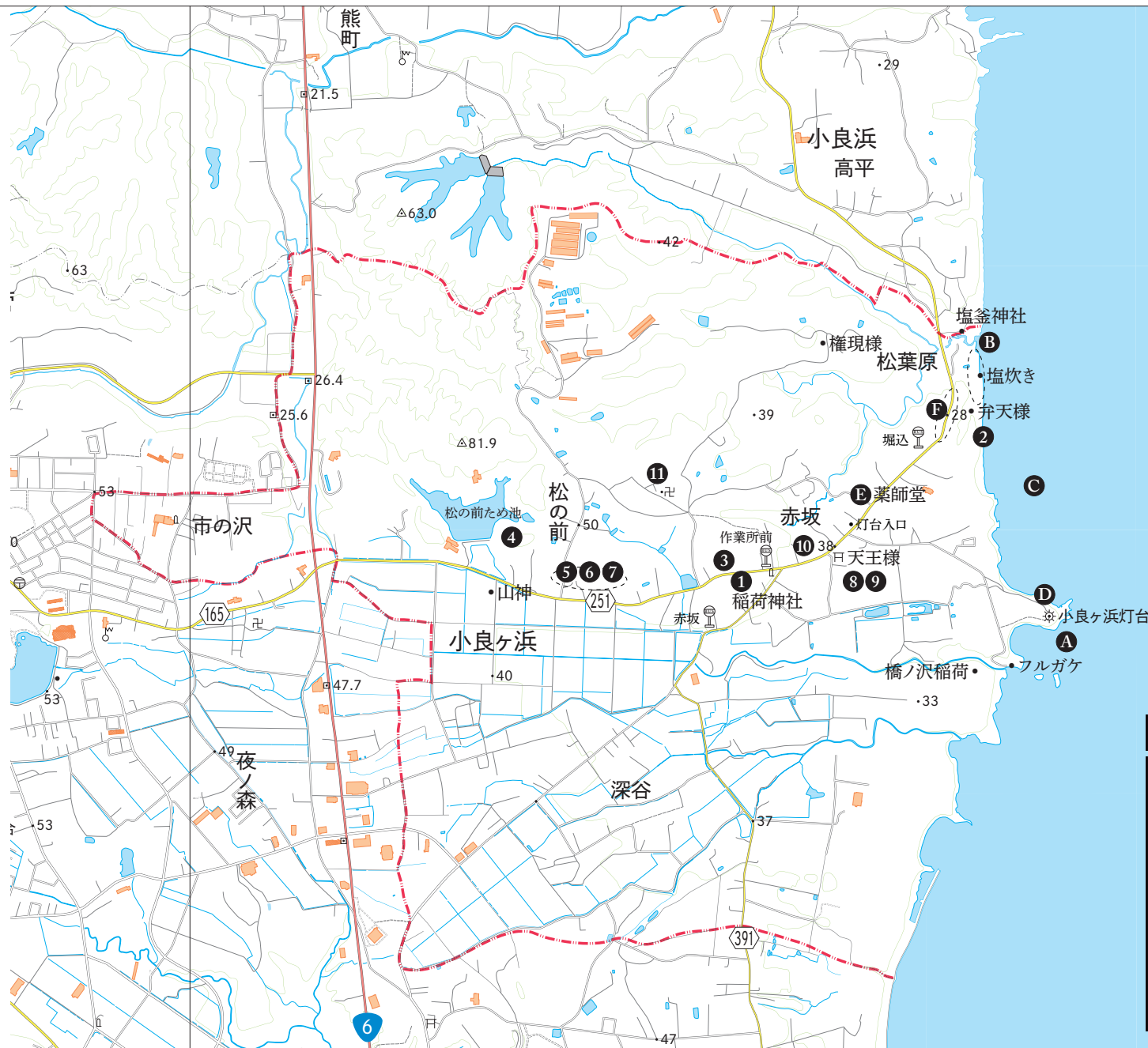
かつての日常生活



34

かつての日常生活





A 小良ヶ浜灯台



D 鎮魂碑



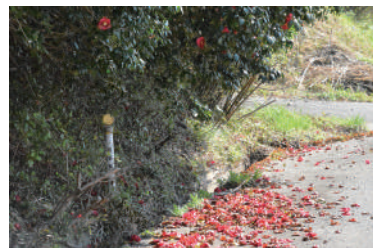
B 境川河口



E 薬師堂



C 小良ヶ浜灯台から北を望む



F 福島県緑の文化財指定のヤブツバキ

① 東堂山塔

うちの近くの三叉路、東堂さんに皆、幣束をあげていた。秋口、赤飯なんかもあげた。秋収穫終わってその頃。

(大岩一彦さん聞き取り)

② 旧墓地六地藏尊

お墓も海っ端でうちのじい様が区長の時に浸食が酷いので移そうとなった。相当古い、小さい頃に肝試し「墓石の裏にお骨見てくるか」今はあらかた共同墓地に移動した。

(関根亮一さん聞き取り)

③ 作業所(跡)

三叉路のところは作業場。三叉路の北の方、作業所、下は土間コンクリート二階建、二階はなんもない。区切りなく大広間、畳引いた。行政区の会合やったり、いろいろやっていた。選挙投票所としても使用した。行政区の物。

(大岩一彦さん聞き取り)

④ 火葬場

火葬場は土手に、窪み作ってその中で焼いた。窪み作ってるだけ。そこに棺箱置いて、上に薪とかなんかを置いた。火葬するところは見たことない。多分棺の上に薪とかそういうものの被せて焼くんだと思う。

(大友正昭さん聞き取り)

⑤ 水神・⑥ 風神・⑦ 雷神

小良ヶ浜は水田があるが、天水田が多く日照りに弱い。日照りが長く続くと昭和初期まで農家三〇戸くらいで庄屋が先頭になって雨乞いをした。蓑着て笠被って、焚き火。小良ヶ浜の上の道路沿いに水神・風神・雷神の三社があり、その前に集まって雨乞いをした。「♪ほーいほーい 沖の方から 黒い雲が 出てきてほーい」それに掛け声合わせて「♪ざあざあと降ってこい ほーいほーい」と。

(大友正昭さん聞き取り)

⑧ 赤坂神社

年に一回の赤坂の祭り。神社は萱ぶきだったけどこれを直して修築して俺は樽神輿やった。そのときそれなら神社皆集めたらよいだろうなって。山王様も持ってきたんだよね。あと一つ持ってきた、権現様、浜からちよつと高い山にある。あとは小良浜では田の神様、水神様なんかも合わせて(祠が)五つあるのかな。五つ六つあるんだわ。堤にもあるし水神様って。

(佐藤乙丸さん聞き取り)

第二章「廣畑義雄氏の事績」参照

⑨ ゴミステーションの案内板

⑩ 赤坂神社

赤坂神社由緒
氏子役員変遷表

行政区内の社祠まとめ
⑪ 共同墓地内の案内板



① 東堂山塔



② 旧墓地六地藏尊



⑦ 雷神



⑥ 風神



③ 作業所(跡)



⑧ 赤坂神社

大岩一彦さん

〈地域活動のはなし〉

昔は境川の手前の浜で、行政区の運動会なんかやったんだよ。昭和三十年代かな、忘れたけれども。二回か三回やったような記憶あるな。駆け足とか、あの頃パン食い競争なんかも、何かお菓子か何か出てやったような記憶あるね。

それと、赤坂神社。お祭りというか芸、あそこで南側に舞台なんか作って、芸能祭なんかやったのも記憶にあります。青年団とか婦人会で。

〈海と地形のはなし〉

子どもの頃は湾洞によく行きました。湾洞の南側の川あるからね。橋の沢つっていつて。あの川に、昔はうなぎなんかあがつたんだよ。崖になってなかったからね。砂浜でなだらかに流れてた川だったから、あがつたんだろうね。それでね、川の記憶ある。川遊びしてると、うなぎの稚魚がチョチヨチヨ、チョチヨチヨ川あがつていつたのを覚えています。あの頃、田んぼなんか基盤整備なんかしてないから。綺麗な水が流れてたんだろうね。

だバス停は住宅前ってなってたけど。

大熊分、坂の上に「対面場」（バス停）あった。ただ、バスに乗って大熊町のほうには出たことはないんだ。やっぱ赤坂から町まで。

（小中）学校には歩いたり、バス来たときはバスで行ったりしましたね。四キロある。小学校の頃はバスで通ったり、雨の時はバスだったね。あと天気の良い時は歩き。あと中学生ぐらいになってからはもう自転車だったね。

あの道路、深谷通って、満開に出て、富岡に行ったよ。砂利道だったなああの頃。それでね、中学校の頃だか、満開辺り常磐線のガードの先、六号国道つくつてたの。ガード過ぎてからずっとあそこ岩、掘削してたからね。そのときね、左側通って自転車乗らないで引張って行って。後ろの荷台に弁当つけてたんだ。そこにダンブに積んでた岩が落ちたんだ。どさーっと。自転車の荷台に。学校に行ってお屋に開けたらば、弁当が潰れてたの。そんな記憶ある。

思い出の場所、満開。満開は、小浜と王塚のちようど中間。「田中瓦屋」からちよつと小良ヶ浜に向かってきて、町営住宅のちよつと手前。右のほうにあがって行く道路あったでしょ。あそこに

うちの姉なんかもね、あそこで夏、水遊びしたらしいから。水の流れて深く掘れてたところあるんだよね。そういうところで遊んだみたい。そんな話聞きました。

〈墓地と檀家のはなし〉

俺、龍台寺なの。小良ヶ浜の佐藤系統は大体地藏院だね。大岩、関根の一部は龍台寺。

それでね、大昔は小良ヶ浜のお墓の反対のほうにお墓あつたって聞いたんだよね。道路挟んで反対側、だから北側か。何か小良ヶ浜の集会所の古文書みたいなのになかったかなんだか。あつたらしいんだよね。うちの親父に聞いてたな。

〈通学路と地名とバス停のはなし〉

バス停では相馬小良浜っていうところあつたからね。灯台入り口とかな、関根商店の辺。三叉路になったところは赤坂だったな。ずっと富岡のほうに向かつては、上松か。あそこはなんだ。深谷の集会所ある辺にもあつたんだよなバス停が。あそこ上松だったな。あとずつと行って、あと住宅前っていうのもあつたよ。深谷に入ってから。長屋だけだな。無縁故住宅って言ってたんだよ。た

「満開」っていう停留所あつたんだよ。あの頃あの道路まだあんな拡張してなかったからね。

〈小良ヶ浜の有名人のはなし〉

小良ヶ浜で有名なのは杉沢太一さんだ。あとはね、いろんな物知りっていうか、私のおばさんの関根千代さん。おばさんは小良ヶ浜のことなんでも知ってるんだよね。あと数字にもあかるいし、書くのもピカイチ。達筆だったんだな。俳句なんかもやってたよね。

おばさんはね、仕事でもなんでもね、男勝りなんだよね。動き方、農具の使い方。あと書くこと、読むこと、なんでもピカイチだったな。おばさんの小学校時代の、通信簿がうち出てきたの。みんな優良だ。今でいえばオール五ってやつ。

〈石碑・祠のはなし〉

赤坂神社にはね、金毘羅神社もあるよね。あと馬頭観音か。あと赤坂神社の狛犬もあるよね。鳥居のそっち（東）だと思ったな。うん。そうだな。あとね、うちの親父に聞いてたんだけど、小良ヶ浜っていうのは他の部落より神社が多いなって言ってたな。大きな祠はないけども、あるね神

廣畑節子さん

〈飛行艇墜落のはなし〉

あの時（飛行艇が墜落した時）は田植のときね、六月頃でしょう。その時、よく私ら苗取りなんかに大人にくっついて行くと、大人たちがね、夜、霧があって、（飛行艇が墜落した時は）こういう時だったんだよってよく、教えてくれたの。

もうみんなで行って、船というか、飛行艇がね、崖にぶつかって落ちたんですよ。またすごいそのときの、かわいそうだったと言ってね。アツツ島かな、北の方から日本に帰ってくる若い飛行士というか、将校さん達二十二、三歳位の人達だったと言ったよ。（墜落した後、遺体を）昔、湾洞^{ワンド}にね、ずっと並べたんだって。凄かったよって、よく私らより上の人たちが教えてくれたけどね。

そして、後年になって石碑を建てたんでしょう。あれは、もう随分たってからですよ。どうしても、あの湾洞のどこ、あそこは霧が深くて、崖が切り立っていてね。よく船なんかも難破したりしたので、小良ヶ浜に灯台建てたんですよ。

道路に沿って山上がって行って、入って上がっていくとこなんだけど風神、雷神、あと水神様が三つ並んでいるんですよ。

稲刈りが終わると、お礼参りといってお赤飯を、供げていくんです。みんな昔はね。田の神様は大事だからなんて言っていましたね。子供らはね、田んぼに田植に連れていったりされるとき、退屈で、あの祠の上の方に登って遊ぶの。もう飽きると田んぼの上の方に登って、木苺採ったりしてね。

〈砂浜での運動会のはなし〉

昔は夏、レクリエーションみたいに境川のところから広がる砂浜で運動会なんかもね、砂浜でよくやったんですよ。（今よりも砂浜が）もっとすぐく広くて。そして、関根商店さんがね、アイスキヤンディー屋さんを出して。子供たちのレクリエーションとして、スイカ割りしたり。それは楽しみだったんだよね。

本当、潮が引くとあその砂浜は広がったんですよ。（運動会には）小良浜の子供たちと大人も参加したから。大人も交ざって参加したから、あの頃ではね、四、五十人は集まったんじゃないのかな。大人と子供。結構、あの頃（昭和四十年代）子

〈廣畑義雄氏の書道塾のはなし〉

（夫であった義雄氏が教職員を）辞めてからだから、今から三〇年位前になるよね。子供たちは学校から家に戻らないで、帰ってくるとすぐランドセル背負ったまま（塾に）来たよね。「お習字やりたいです」って。習字道具とか置きっ放しだったりしていたんで。塾になっていたのが物置の二階だから、もうみんな（道具）置きっ放しでした。

あの頃は、「若草」という書道の会に入っていて夜の森の坂本雅流先生たちと一緒にやっていたんですよ。うちは小良ヶ浜支部なんて行ってね。そんな大層なものじゃないですけど。

〈コウド（広土）の思い出〉

（写真を見て）「これは田んぼ」今フレコンがいっぱい置いてあるとこ、あの辺をみんな「コウド」、「コウド」とよく言ったんです。（農作業の際に）コウドのほうに行ってくるってよく（聞いてました）。耕す土で「コウドかな」。まさか……。

（写真を見て）これ、広い土って書いてある。コウドってこれだ。「広土にて」って書かれている。あと、田植終わると、よく祠にね、お赤飯とか何か持って行ったの。田の神様って広土のとこの。

供たちも多かったんですよ。娘が生まれた頃になつたらバスに乗る人あんまりいなくなっただけ、本当は結構子供たちも多くて、子供の夏の運動会という親子でみんなが集まってやったからね。子供会の行事みたいだね。

それが後の時代になってだんだん砂浜がなくなっちゃったんですよ、あそこね。狭くなってくるからね。運動会あそこやめて、違うとこでやるようになった。夏休みのお楽しみみたいな感じでしたよね。

そして、岩場がね、もっとずっと（先に）出ていたんですよ。二軒くらい家もあったんですよ。猪狩重信さんという人とワタナベさんだか、二軒くらい家がありました。岩場が崩れてきて危ないからみんな山のほうに移りました。崩れるといっでみんな引越してきたんですよ、もうあそこの通りは結構にぎやかだったんですよ。岩から真っすぐ上がるような感じだね。

〈塩炊きのはなし〉

私らね、中学生の頃はね、塩炊きといって海水を汲んで塩を作っていました。家ではオヒデさんといって、人を頼んで海水を汲んできてね。釜が

夕方三時頃から草刈りやっぺ。六時頃無事に帰つてきて、物置の下で焼き肉やるんですよ、土曜日の晩あたり。五、六人電話かけるんだわ。おい、

今日はやるぞ。そうすると、みんなして自転車で来るんだわい。九時頃までラジオかけて何だかんだしやべってコミュニケーション図って。

三瓶一見さん

明治十四年（昭和四十年）八四歳で没。
漁協組合長を五一年間務め、小良ヶ浜漁港の開削に尽力。

三瓶一見氏への聞き取り調査は、昭和三十年代に行われたとみられます。調査の経緯や聞き手が誰なのかは不明ですが、録音テープのコピーが富岡町公民館で長く保管されていました。今回筆耕したのは、町が管理していたコピーテープの音声です。筆耕に当たり、聞き取れない箇所は省いています。

（――聞き手）

一見　そうです。

――　その四十八社に行くときは何か前祝いとか。

一見　それはね、大漁に来た船はね、そうして前祝いだって、ひさしのついたところの、看板のついたところの着物をみんな勢ぞろいで着たもんですよ。それを着て、そうして旗を立ててね、そうしてお参りに行ったもんですね。

――　やっぱりその船の旗を立てていくんですね。ええ、そういうわけです。そうして、今度帰日には富岡の町でごちそうを食ってね、そうして帰ってきたもんですよ。

――　面白いですね。

一見　はい。のんきな仕事したもんで。のんきな時代なんですね。

一見　はい。

――　あと、今度は十七日は……。

一見　山の神のお祝いですね。山の神といって広土のところの田んぼの脇に石のお宮があるんですよ。そこさ行ってお参りしたもんです。そんなことです。

――　そうですか。大体一月はそんなものですか。

一見　それから、いろんなのも小さいお宮があるもんですから、そこに参拝をする。それから今度またこの庶務社は太田の八幡神宮がこの氏神になっているわけなんです。上郡山の太田に。そこところさ今度お参りで、また今度は下郡の四十八社、漁業関係の人は。

――　漁業関係のやつね。

一見　ええ。お参りに行ったもんですよ。それは十五日の日ですね。

――　一見　はい。

――　それは、その旗を立てたりなんかしてくるわけですか。大漁旗か何か。

――　あと。

一見　十五日にはお正月を送ったもんですね。正月の送りね。

――　一見　松飾りをしてね。その松飾りを今度みんな取ってしまつて、そしてしめ縄から何から全部取ってしまつて、それはここではですね、浜へ持つていつて海へ流したもんですよ。

――　一見　続いてですね、二月は八日のあたりですか。二月八日にはね、そのときには今のその門口ですね、入れるほうの門口に籠をね、棒と籠をつるして、そうして立てたもんですよ。悪魔よけというわけですね。

――　鎌を立てるといふのは。

一見　その籠にこうやって鎌を別に。そいつはね、やっぱし悪魔よけですね。

――　一見　それから、今度漁業のほうを申し上げていると、ここでは漁業関係の人は、漁業関係の人はですね、正月の二日には出初めをして、そうして今度それで終わり。今度三日以後はね、ウタセ船といって、ギス船でもウタセ船でもいいです。そいつで船を沖へ

富岡町の北東に位置する小良ヶ浜は、町内でも比較的古い記録が残っている地域である。『富岡町史』一巻では、文禄四年（一五九五）の文献にすでに小良ヶ浜に比定できる地名が掲載されていることを紹介している。

過去の史料から人口規模をみると、江戸時代の記録では、延享四年（一七四七）には七二戸三四六人（『町史』別巻四〇九頁）。明治十七年（一八八四）には四七戸三九七人（『町史』別巻四六九頁）。いずれも大字小良ヶ浜の範囲であるが、江戸時代後半に飢饉による人口減があったことを町史では指摘しているものの厳密な数字は判然としない。

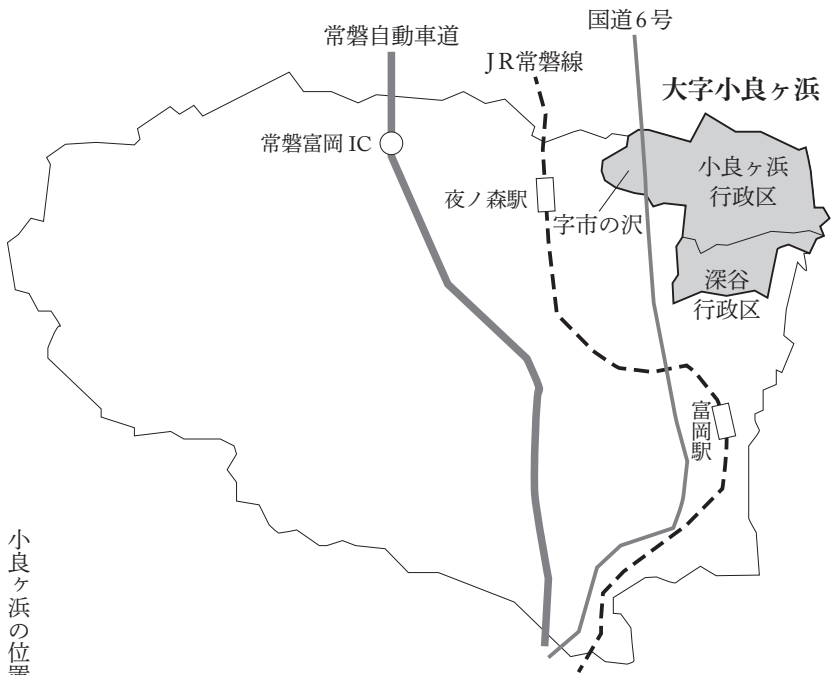
二〇一一年二月末時点での小良ヶ浜行政区の住民数は一三四世帯三五九人。深谷行政区と字市の沢を含めた大字小良ヶ浜では三二八世帯一、〇四四人の規模であった。

全町避難から十一年が過ぎた現在、地域は震災前の姿から大きく変わってしまったが、協力いただける範囲の聞き取りなどから、小良ヶ浜の人びとの営みの一端が見

第一章

小良ヶ浜という地域と行政区

門馬 健



小良ヶ浜の位置

に関しては、「小良ヶ浜区有文書」により明治期まで遡ることができるものの、熱意や名誉評価、役員への羨望などは聞き取りからしか得られない情報であった。

このほか、現代まで続いた土葬文化や葬送儀礼、戦時中の飛行艇事故の目撃談、昭和まであった雨乞いの歌と儀式など、小良ヶ浜固有の文化ともいえる証言が得られている。(中略) 語弊があるかもしれないが、地域での暮らし・習俗の再生産が断絶し、当面避難指示が解除されない見込みの文化を継承するためにも、「耳を傾ける」ことが重要なのだと思う¹⁾。

「小良ヶ浜区有文書」は、明治―昭和の小良ヶ浜の人びとの日常を鮮やかに再現してくれる良質な史料群である²⁾。このような史料群が継承されてきたこと自体に、行政区としての自治意識、まとまりの強さが表れている。このまとまりの強さは、震災後も続いているという。

他方で、震災以前は「隣近所」や「親戚同士」など、人と人のつながりが「当たり前」だったために、全町避難による住民の離散は大きなストレスとなったともいう。

女性団体は避難先で集まれるメンバーで旅行に行くなど交流を維持、行政区としては毎年総会を開き、区にまつわる情報と近況の交換を行うなど工夫と努力を重ねてきた。しかし高齢者同士や遠隔地で生活する住民同士にとって、一堂に会することはやはり難しいという。

「小良ヶ浜区有文書」は明治時代から地域に伝わる小良ヶ浜のアイデンティティーといえる。「小良ヶ浜地域とはどのようなところか」「小良ヶ浜の人びとはどのような暮らしをしていたか」など、先人が積み重ねてきた歴史、培ってきた文化、小良ヶ浜の地域性を伝えていくために、「区有文書」の保存・継承はもちろんのこと、特に今を生きる人びとの貴重な声を寄せていただき記録していくことが重要となつてこよう。

¹⁾ 門馬健『「記憶資料」の保全活動 全町避難から始まった富岡町の聞き取り事業』『BIOCTY』八五号、ブックエンド、二〇二二年。
²⁾ 「小良ヶ浜区有文書」については、西村慎太郎「近代福島県富岡町小良ヶ浜の文書管理——複合災害・縁故地・区有文書」『東アジアにおける知の往還』勉誠出版、二〇二二)に詳し。

第二章 小良ヶ浜・小良浜争論

井上拓巳

東廻り航路の中の小良ヶ浜

太平洋に面する小良ヶ浜は、漁業や塩業など海からの恵みを楽しむ生業を有していた。また海路を通じて、太平洋沿岸の各地と結ばれていた。ここでは主に小良ヶ浜をめぐる海上交通の問題についてみていきたい。

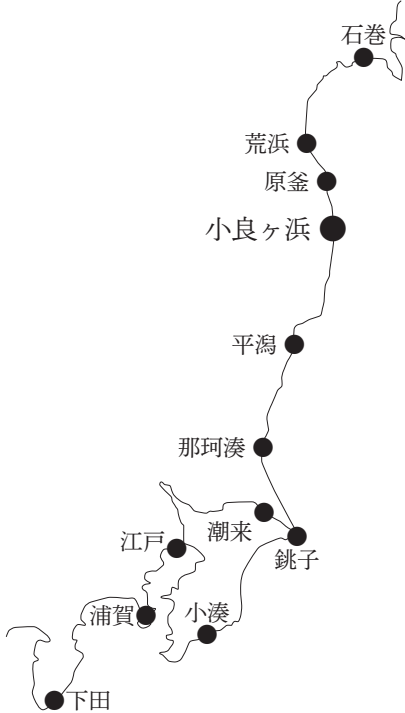
江戸時代の日本では、海上交通が飛躍的に発展した。幕府の命を受けた河村瑞賢が東廻り航路と西廻り航路における海運を整備したことや、江戸と大坂を結ぶ航路で活躍した菱垣廻船や樽廻船、また日本海側で活躍した北前船の存在は特に有名である。

小良ヶ浜は東廻り航路に面しており、小良ヶ浜沖を多くの廻船が通航していた。廻船は関東地方と東北地方をまたにかけて、多くの物資を輸送していた。江戸時代を通じて、年貢米輸送が広く行われていたほか、東北地方の生産物や、江戸・上方などの生産物が、海上輸送され

ていた。

まず、小良ヶ浜が面する東廻り航路の海運について、その概要を見たい。江戸時代以前から、海上輸送は行われていたものの、全国的な海運に組み込まれるのは江戸時代のことである。これは江戸幕府の首都としての江戸が発展し、大きな人口を抱えるようになったことが要因

図 東廻り航路上の小良ヶ浜の位置



への聞き取りで見つけることができたテーマであった。聞き取り結果をもとに江戸時代や明治時代の史料を調べた結果、大熊町の小良浜との協力関係など『富岡町史』に描かれていない地域の様子を垣間見ることができた。有史以来、小良ヶ浜の人びとがつかないできた製塩は、社会情勢の変化などで途絶えてしまった。だからこそ、聞き取りで得られた昭和の製塩の記録は、小良ヶ浜にとって貴重な歴史資料となるであろう。

「参考文献・史料」

『富岡町史』、『大熊町史』、『福島県史』、『いわき市史』
「事務摘要」、「役場事務関係書類綴」（『小良ヶ浜区有文書』）

第五章 三瓶一見について

西村慎太郎

三瓶一見については『富岡町史』にその人物像や小良ヶ浜漁港開港について触れられている（『富岡町史 一通史編』、富岡町、一九八八年、五三八頁～五四四頁。『富岡町史 別巻 続編・追録編』、富岡町、一九八九年、五一頁～五二頁）。ここではそれら先行研究を踏まえつつ、小良ヶ浜に遺されて、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故以降の富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム（歴文PT）によって保全・保管されている資料を用いて詳述してみたい。

三瓶一見は明治十四年（一八八二）十二月十八日に父・豊松、母・リンの長男として小良ヶ浜村字岩ノ作に誕生した。三瓶家の生業は代々漁業と塩業が中心であったものと思われる。

明治三十六年六月二十三日に富岡浜漁業組合設立総会が行われ、一見は設置発起人のひとりに名を連ねて、監事に選出された。九月五日に福島県より設置の認可が下

りたが、設立総会では理事兼組合長に関根神酒蔵が就任しているものの、『富岡町史』には明治三十六年に一見が組合長に就任したとの記述が見られることから、早い時期に一見が組合長を継承したものと考えられる。なお、明治四十五年三月三十日の富岡浜漁業組合登記申請書には一見の自宅（字岩ノ作六二番地）が組合の事務所として記されている。以後、昭和二十八（一九五三）まで五二年にわたって組合長を務めた。

ほぼ同時期、小良ヶ浜において大きな問題となっていたのは縁故地引き戻しである。縁故地引き戻しについては第六章の「近代の林業と縁故引戻地」の項で詳しく述べられているので、ここでは簡単に触れてみたい。

そもそも近世段階の日本では村持の林野や複数の村が入会で用いる林野などがあり、薪炭や枯れ葉などを利用してきた。明治五年壬申地券の中で村持や入会地の林野は「公有地」として定められたが、地租改正公布の過程

いたため、新しく設置された組合と目される。第三に、昭和十一年十一月三日に第一回委員会が開催された富岡町振興委員にも就任している（『富岡産業時報』二九号、昭和十二年一月一日刊行）。この委員会は渡辺実町長を会長としたもので、「本町ノ恒久的振興・発展上、町是トシテ敢行すべき点」を諮問する機関である。一見は産業部委員となっているが、『富岡産業時報』には昭和十二年一月七日開催の第三回委員会までしか記されており、おそらく「富岡町振興案」（『富岡産業時報』増刊号、昭和十二年二月一日発行）作成のために結成された組織であろう。さて、一見が建設を進めた小良ヶ浜漁港だが、漁船が増し、その係留などに不便が生じたため、昭和十七年に

隧道の拡張を行った。戦後、昭和二十八年に隧道を壊して、切通しの形状としている。同じ年、一見は五〇年間務めた漁業組合長を退職した。翌二十九年一月二十五日、一見のことを顕彰するため、漁港の見える地に「三瓶一見翁之碑」が建立された。そして、一見は昭和四十年（一九六五）一月十二日亡くなった。享年八四歳であった。戦後育ちの富岡の子どもたちにとって一見の名は郷土の歴史を学ぶ教科書に掲載されており、今なお馴染み深い名前であろう。とみおかアーカイブ・ミュージアムでは、三瓶一見が用いたと伝えられている釣針が所蔵されている。

第六章 近代の林業と縁故引戻地

天野真志

林野をめぐる変遷

日本には広大な森林が存在する。平成二十九年（二〇一七）に実施された林野庁の調査によると、国内の森林面積は約二五〇五万ヘクタールであり、国土面積のおよそ七割を占める。これらの森林は、国が所管する国有林、地方公共団体が所有する公有林、さらに個人や社寺、企業などの所有地である私有林に大別されるが、こうした森林の管理形態については、長い歴史経過のなかで変容してきた。特に近代以降、それまで共有地として利活用されてきた林野をめぐり、各地で様々な運動が展開した。福島県内でも明治期以降林野をめぐる争いが見られ、小良ヶ浜では「縁故地引戻し運動」と呼ばれる運動が知られている。本章では、近代における林野のあり方について概観し、小良ヶ浜地域の縁故地をめぐる動向をみてみたい。

明治期の土地制度と林野

江戸時代、各地に広がる山林の多くは、人びとが自由に出入りして木材の伐採や薪炭の採取が許され、草山でも秣を求めて草刈りが行われていた。「入会山」と呼ばれたこれらの土地は、いわば村の共有地として利用され、そこでの資源が村で共同管理されていた。こうした地域での慣行は、明治になると大きな転換が迫られていく。明治新政府は、戊辰戦争が収束するなかで政治・社会の改編に向けた取り組みを進めていくが、その過程で林野をめぐる制度改変も推進していく。

明治期の林野は、国と府県、さらには地域との間で複雑な変遷をたどる。明治二年（一八六九）から政府は「官林」を設定し、かつて領主が所有した地と社寺が管理していた林野の一部を官有地として管理を進める。しかし、明治五年（一八七二）に入ると、政府では官林の

¹ 林野庁「森林・林業統計要覧2020」(https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/roukei/atachi/pdf/youran_mokuzi2020-9.pdf。最終閲覧二〇二二年一月一〇日)。



12



13



14



15



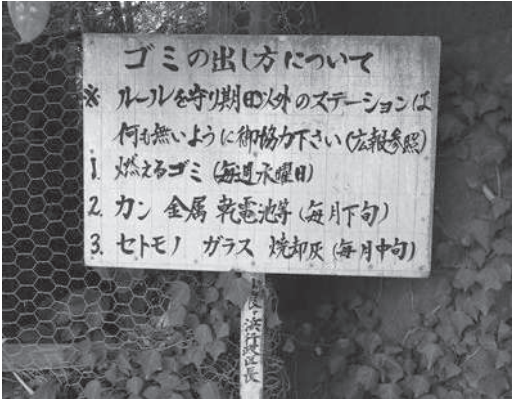
16



17



18



19

12 13 14 現在の共同墓地内にも廣畑義雄氏の筆跡を見ることができる。共同墓地敷地内に所在する薬師堂前には、薬師堂周辺に骨壺を置いていくこと、造花を道内に入れていくことを禁じている。

また、共同墓地の敷地脇を通る道路沿いには墓参りの際のゴミの持ち帰り等のお願いが記されている。

第二章 寺院・神社・祠・祭り・墓地・葬送儀礼

猪狩英伸

【地理】

福島県の太平洋岸のほぼ中央部で、富岡駅よりバスで十五分、国道六号線より東にはいる。北は旧相馬領の大熊町熊川と境し、西は大菅、南は小浜で漁村として発達してきた。阿武隈山地東麓の第三紀層、凝灰岩の高さ五〇メートル程度の丘陵大地が急な海岸線をなし、小良ヶ浜燈台の眺望は優れている。

【歴史】

部落の起源は不明であるが、常陸風土記に「陸奥国石城郡苦麻之村を道後とす」と記され、苦麻之村とは現大熊町熊町であることから、石城郡に属していたようである。後、磐城国檜葉郡というが江戸時代は延享四年までは内藤氏領であった。以後幕府直轄の天領として富岡町と同一の施政下にあったが、天保七年より小浜部落と共に棚倉藩飛地となったようである。この点に若干の異論

がある。明治維新により棚倉県となり、明治四年磐前県に編入、更に明治九年福島県に編入された。現在の戸数は少ないが、天明の飢饉前は大きな部落であったといわれる。同二十二年まで小良ヶ浜村であったが、富岡村に編入、同三十三年富岡町となる。

【生産の沿革】

大熊町との境をなす境川が海にのぞむ地は、昔は遠浅の海岸であった。漁業はここを中心としてみられる地引網、小舟による漁であったらしい。明治期に入り、鰹漁がおこなわれるに従い、良港を求める声が起り、大正六年頃より三瓶一見を中心として部落民より、南端の湾頭に現在の港を設け、昭和六年に完成した。しかし大型漁船が多数入港できず、交通の不便なことなどから盛んにならず、近海漁業のみであった。

（出典：福島県史 第二四巻民族二 七四一―七四二頁）

